

私は魔術師。先日、聖杯戦争という物を知って、その時に召喚されたというセイバーのサーヴァントの事を知り、心を奪われてしまった。あんな美少女を自分の思い通りに動かし、辱め、陵辱できたらどんなに素晴らしい気持ちの良い事だろうと、毎晩妄想を膨らませた。

そして私は、聖杯戦争と関係なく赤セイバーを呼び出す魔術を研究し、自分の肉体を代償として召喚する事に成功したのだった。

「私」「これが生身の赤セイバーか…やっぱりめちゃくちゃ可愛い…」

私は、目の巨大な鏡に映し出された自分自身の姿を見て、思わずうっとりしてしまいました。





そう、私は自分の肉体を代償に召喚の魔術を使用したため、自分の肉体が赤セイバーの肉体に変化してしまったのだ。本当なら赤セイバーをサーヴァントとして召喚し、令呪で操って犯したかったが、聖杯戦争中ではない以上、それは難しい。

ならば自分自身が赤セイバーの体になってしまえば、どんな事だってやりたい放題できるのではないか、そう考えたのだ。

【私】「ふふふっ……この美しい体が、私の意志で自由に動く……」

本当に……本当に自分の体が赤セイバーになったんだ……」

私は期待に胸を膨らませながら、この美しい体で何をすべきか、妄想を膨らませた。





【私】「…これは自分の体なのだから、遠慮する事は無い。  
新しい自分の体、隅々までしっかりと観察しなければ…」

私は、まるで彫刻のように整った  
しなやかな指先を伸ばし、自分の髪、  
頬、唇、胸、おなか、太ももへと触れた。  
さらさらした金髪、張りのある頬、  
プルプルとした唇、柔らかく大きく張りのある胸、  
引き締まった華奢なお腹、完璧な脚線美を誇る  
すべすべの太もも、どれも非の打ち所の無い肉体だ。

【私】「こ、これが美少女の肉体か…ゴクリ…」

私は、自分自身がこんな美少女になったという事を改めて実感した。





【私】「それじゃあ、次は……」

私は、いよいよ赤セイバーのもっとも大事な所、その局部へと指を伸ばし、レオタードごとに、その割れ目をなぞっていった。

【私】「ひいっ……!？」

スベスベのレオタードの上から指でなぞっただけで、

思わず悲鳴のような声が出てしまうほどの感度の良さだ。

赤セイバーの体は興奮のためか、割れ目は少し濡れており、

レオタードの割れ目部分にわずかな染みを作り、指先を湿らせていった。







【私】「あ、これはすごい……こんなに気持ちいいの……」

女の体の気持ちよさは、男の体とは比較にならないと聞いていたが、まさかコレほどまでとは思わなかった。私は肉欲に耐え切れず、レオタードの股間の布地をずらし、割れ目を直接指でなぞり始めた。

【私】「ひゅっ……あっ……ひゅっ……」

少しずつあふれ出す愛液を指で掬い取り、割れ目を左右に開きながら、敏感なひだをなぞるようにこすり上げる。気持ちいい。指が止まらない。





私は夢中で指を動かす。ひだをなぞり、クリトリスを指先で転がしていく。

【私】「…あっ…ああっ…！」

自分が本来男である事も忘れ、情けないメスの声を溢れさせる。そしてクリトリスを強くつまみあげた直後、生まれて初めての女の絶頂が訪れた。

【私】「イグツッ…！ ああああああっつっつっ…！」

強烈な快楽に、頭が真っ白になり、体が跳ね上がり、腰が浮き上がる。

同時に、無意識に我慢していた尿意が我慢できなくなり、

愛液と尿が混ざった液体を床へと撒き散らしながら、私は情けないイキ顔をさらしていた。





【私】「はあ…はあ…」

女の体による絶頂はしばらく続き、私の脳裏に女の快樂の素晴らしさを嫌というほど思い知らせてくれた。そして体が絶頂の余韻から、通常の状態に戻るに従って、再び肉欲がむらむらと湧き出してきた。

【私】「フフツ…流石は赤セイバ…この肉欲の強さ、

聞いていた通りだな…。これなら色々楽しめそうだな…」

私は絶頂の余韻をじっくりと楽しんだ後、次のプレイのための準備をした。





【私】「ぞ、それでは…次は…何がどうなっているか、じっくり観察しなさんな…」

オナニーの余韻も完全に収まった私は、その場にしりもちをついて座り込み、両足を手で抱え込んで大きく足を広げ、従者が持つ鏡に向けて股間を突き出した。

【私】「んっ…レオタードに張り付いているっ…」

オナニーによって濡れ、程よく開いた膣口が、レオタードに吸い付くように張り付くと、レオタードの適度な締め付けと肌触りの心地よさを感じる。濡れてすけたレオタードの向こう側に、ピンク色の花びらのような赤セイバーの秘所が鏡に映し出され、丸見えになっている。







【私】「ふふっ…そ、それでは従者よ。余の割れ目を左右に開くがよいっ…」

私は従者に命令した。

一人称が私ではなく、赤セイバー通り余と言ったのは、もっと赤セイバーになりきって、この体に酔うためだ。

【私】「んっ…あああっ…！」

従者はレオタードをずらし、割れ目を左右へと引っ張った。

セイバーの秘所は柔らかく開き、そのピンクの肉壁を鏡へと映し出した。

【私】「こ、これがセイバーの…！」

愛液でぬらぬらと光ったセイバーの花びらはとても綺麗で、私はさらに奥まで観察したくなっていた。

